

中小企業の皆さんへ

機械設備の購入は
有利な貸与制度で

中小企業が生産性の向上、コストの低下等競争力を強化して経営の安定化を図るために、近代的設備を導入することが重要です。

(財)県中小企業振興公社では、新鋭機械を割賦で譲渡する設備貸与事業を行っています。

まだ資金に余裕がありますので、本制度のご利用を。

- ・貸与限度額 2,000万円
- ・貸与損料(利息相当) 年5%
- ・返済期間 1年据置、4年半

申込者の資格要件など詳細については公社へお問い合わせください。

新潟県西堀前通2番町715番地6
電話(0252)22-0025番

新潟県の最低賃金
1日 3,249円に

このほど、新潟県の最低賃金が改正されました。

最低賃金の件名	最低賃金額 1日	1時間
新潟県最低賃金	3,249円	407円
食料品製造業	3,569	447
織維産業	3,352	419
木材、木製品家具装備品製造業	3,260	408
出版印刷業	3,691	462
機械、金属製品等製造業及び自動車整備業	3,357	420
卸売業、小売業	3,744	468
出刊連業	3,387	424
機械、金属製品等製造業及び自動車整備業	3,806	476
卸売業、小売業	3,491	437

※同業種でも軽易な業務に主として從事する者や技能習得中の者などは、賃金が異なる場合もあり、また、新潟県最低賃金を適用する者があります。

横越村、新潟市、亀田町、亀田郷土地改良区では、亀田郷地区的浸水被害を防止するため、昭和六十年度から県営事業として排水改良事業を採択してもらうよう申請しています。

亀田郷地区たん水防除
事業にご理解を

村では、新潟県交通災害共済組合の一日一円の会費で、会員相互の助け合いを目的とした交通災害共済の加入をよびかけています。十二月末現在の加入は、村民の七六・九%にあたる六、九二〇人です。

横越村の構想の概略は、亀田郷地区的東半分を対象として本郷と藏岡に排水機場を新設すると共に、幹線排水路を改良して豪雨時に一時的に増大する排水量を地区の上流側で阿賀野川へ排除して、農地、住ます。

宅地の浸水被害を防止しようとすることです。この事業を実施するためには、関係する農家の皆さんの同意が必要です。

加入できる人: 横越村に在住の人は、どなたでも加入できます。

掛金: 一人年額三百五十円です。(途中加入の場合も同額)

見舞金: 見舞金の請求は、事故発生の日から一年以内ですから、交通事故にあつたら役場住民課の係に相談してください。

加入手続: 二月中に嘱託員を通じて六十年度の申込書を配付しますので、一人三百五十円を添えて申し込んでください。

のあのの「のがれがたきおまえ」は、逃げようとしても、逃げられないおまえという意味ですが、「三日月たち」という短歌のことに話す

どう結びつけ、どう解決すればよいか。迷ふところです。

お盆の借金取りに対する自覚の句だ。この句は、お盆の借金取りに対する自覚

ますと、この句は、

よくよく考えてみます。つまり、明治・大正時代は、陰曆の七月がお盆ですから、当時の商店でも

精算をしなければならない。

三日月はちょうど合口のようであとは泣いても笑っても、十日後の十三日までに半年分の益・暮れ二回の勘定でしたか

ます。ちょっとわかりにくい句ですね。

このほかに、「秋の夜の草を囲むもの一人を助くるなし」

の夜の草を囲むもの一人を助くるなし」

けのこ泣こうとてか

い間見」「女がよく

鳥肉を喰い木れんの紫」というように、

自信があるといっているので

なかなか簡単には意

味がわからぬ句ばかりです

存さんが生前に、俳句なら

やがて昭和二十三年頃から

良寛の歌を詠み、昭和三、四年ころから民俗学専門に走つ

ていくのです。

月の三日月たち」は

風景ですから誰れも

が分かりますが、そ

りです。

例え、「七月の

たきおまえ」――

この句ですが、七

月の三日月たちのがれがたきおまえ

めました。

本人が自信がある

といつていてる俳句で

すから、さぞかし立

派なものが沢山ある

だろうと思つて捜し

求め、六〇句ほど集

つてきました。

存さんは、非常に年をとつてから文芸をはじめたと思つている人がいましたが、実は一六歳の学生時代で、すでに「落穂草紙」という文芸雑誌をつくっていました。

存さんは、民俗学者として有名ですが、私は、文芸のことで十年あまりおつき合いをしてきました。

存さんは、非常に年をとつてから文芸をはじめたと思つている人がいましたが、実は一六歳の学生時代で、すでに「落穂草紙」という文芸雑誌をつくっていました。

私はいつも存さんと短歌のことについていましたので俳句をつくる人だと存らなかつたのです。

存さんは、民俗学者として有名ですが、私は、文芸のことで十年あまりおつき合いをしてきました。

存さんは、非常に年をとつてから文芸をはじめたと思つている人がいましたが、実は一六歳の学生時代で、すでに「落穂草紙」という文芸雑誌をつくっていました。

私はいつも存さんと短歌のことについていましたので俳句をつくる人だと存らなかつたのです。